

Journées de Calorimetrie et d'Analyse Thermique

Grenoble 1975年5月22-23日

(東大宇航研) 神戸 博太郎

アルプスの西の山裾にあり、冬期オリンピックで有名なグルノーブルはフランスの原子核研究の中心である。街外れの広大な敷地に、グルノーブル原子核研究センター(CENG)があり、それに隣接して核科学研究所(ICN)の建物がある。2日間に亘りここで開かれた表記の会議に出席する機会をえたので、その模様を報告する。

今春、イタリアのナポリ大学から1ヶ月間招待されて、ヨーロッパに行くことになっていたとき、リヨンのクレシェ教授から通知をうけたのがきっかけで、フランスの熱化学・熱分析の研究者たちと会うつもりになった。

この会議は、フランスの熱量測定・熱分析協会(AFCAT)とフランス化学会の実験熱力学グループ(GTE)とが連合して開いたもので、ちょうどわが国の熱測定討論会に相当するものといえよう。

会場は研究所の階段講堂で、2日間にわたり3つの大きなテーマによる講演発表が行なわれた。原則として、討論を含めて1件20分で、普通のスライドが用いられ、フランス語が主であった以外は、わが国の討論会と全くちがいはない。

第1のテーマは、200 K以下の低温における熱量測定で、ノーベル賞受賞者ネエル教授の開会の辞があり、ミシガン大学のウエストラム教授の“低温熱量測定-1975年の展望”と題する1時間の特別講演から始まった。このセッションの題目は、すべて低温の比熱測定法とその無機物および金属に対する応用であった。その後で、小さいテーマとして吸着熱の測定がとり上げられた。

第2のテーマは、もっとも大きいもので、中高温における凝縮相の研究であった。これらはさらに相転移と熱力学量の測定の二つに分類され、それぞれ10件ほどの発表があった。相転移の部分にDTAを使ったものが、2つあったが、他はすべて熱量測定であり、フランスにおいて、伝統的に熱量測定の研究が盛んであることを、改めて認識した。もっともこれはこのグループの特殊性かもしれない。またほとんどが無機物および金属であるのも



奇妙な感じがしたが、参加したフランス人の意見では、これはグルノーブルの土地柄によるものであったらしい。

第3のテーマは、いわばその他の部で、ここにはDTA, DSCの応用が数件あった。私のポリイミドのTMAに関する報告もここで行なった。

第1日が終わった後で、CENGの食堂でビュッフェ式のパンケットがあり、全員が集って友好を深めた。大阪の討論会に参加したマルセイユのタショワール教授、ICTAのフランス代表アルムラン嬢などの顔もみえた。また午前午后の休憩の際には、無料でコーヒーや冷い飲み物が供せられた。こういうときに、立ち話で誰れ彼れとなく話し合うことによって、お互いに知り合うきっかけをつくるのが、ヨーロッパ(そしてアメリカ)式である。日本人はどうも飲食を通じて、軽く交際するのが苦手であるように思う。

この会議の参加料は、これらの費用を含めて、会員(上記のフランスの二つのグループの)150F、非会員185Fで、今の相場からすると何れも1万円以上であり、決して安くはない。しかし全体の印象としてフランスの学会は、アメリカに比べると参加者の年齢が若いように思えた。

(なお、プログラムの詳細は、P. 135に掲載されている。)